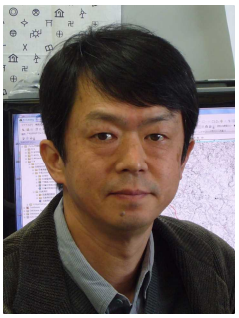
隠者のつぶやき

－功績賞を頂いて－



近藤昭彦＊
＊千葉大学名誉教授

このたびは水文・水資源学会功績賞を頂き，誠にありがとうございました．正直に申しますと自分に功績などあったのだろうかという戸惑いもあるのですが，ご推薦くださった方々，会員の皆さまには心より感謝いたします．

私が水文・水資源学会に入会したのは設立2年目でしたが，学際科学でもある水文学における多分野の方々と交流できること，また水を起点としてその先に踏み込むことができる水文・水資源学の特徴が居心地の良さを与えてくれました．私は専門分野に対するこだわりは強くなく，おもしろく，そして重要だと感じたら躊躇なく入り込んでしまう性格です．その結果，専門性は広いけれど浅くなり，だんだん強化されてきた業績評価社会では悩ましいこともありましたが，水文・水資源学会の気風には助けられました．現場の“問題”に関わることになった後年は自分は何でも屋で良かったのだという確信を持つようになりました．

自分のキャリアの中で不思議に思うことがあります．今でも地下水の専門家として関連する委員会等に呼んで頂くことが多いのですが，研究として地下水に取り組んだのは大学院時代のみなのです．それは地質学，地理学，数値モデル，リモートセンシングなど，様々な分野の知識，経験を重視し，現場で感じることを重視してきたことと関係しているのかなと思っています．それはまた，総合力を意識することにもつながり，後年，環境，すなわち人，自然，社会の関係性に関心が移るとともに，理工系だけでなく，人間的側面も含む人社系にまで入り込むようになりました．

そのきっかけは，1990年代半ばから約10年続けた中国における水環境に関する研究において中国の急速な発展を背景に，中国のことは中国に任せ，自分は国内において好奇心駆動型科学の感動を再び経験したくなって国内回帰したことにありました．最初に公共用水域における硝酸性窒素の問題に取り組みましたが，それが縁となり千葉県が事務局を担う「印旛沼流域水循環健全化会議」に参加させて頂きました．この会議は様々な立場のステークホルダーが問題の解決を共有する“超学際”の先駆けだったと思います．当初の目的は印旛沼の水質改善で，科学的手法も取り入れましたが水質は改善しません．試行錯誤するなかで会議の目的は印旛沼流域の地域創りに移ってきました．流域をあらゆる要素が相互作用するシステムとして捉え，システム全体の最適化の中で個別の目的を達成するという考え方が生まれてきたのだと思います．そのシステムの中には市井の人々も含まれます．

2011年3月11日の東日本大震災では福島で原子力発電所の事故があり，ふるさとの喪失，強制的な人と自然の分断という痛ましい事象を経験しました．私は当初は文部科学省，規制庁のチームで山地斜面における放射性物質移行のモデル化を担当していましたが，千葉大学園芸学部が計画的避難区域に指定された川俣町山木屋地区と交流があったことから，現場との協働で放射性物質のモニタリングを行い，地域と情報共有を行うこともできました．その過程で，“川俣町山木屋地区除染等に関する検証委員会”に参加する機会を得て，現場の人々の深層を知るようになります．この時に問題の背後にある人間的側面の重要性を強く感じることとなります．

印旛沼や福島において対峙している人は顔が見え，名前がわかり，暮らしがある人です．宗教学者の山折哲雄氏によると，このような人を大和言葉では“ひと”というそうです．漢字の“人”は数字と属性で表され，

科学の言葉で記述できます．“ひと”の認識こそが問題の場における分断解消の手がかりになると思います．

印旛沼と福島における経験は問題の解決とは何かに関する考察を促しました．トランス・サイエンスの考え方によると科学だけでは問題は解決できません．科学は問題の表層の理解には役立ちますが，問題の本質は深層にあると思います．問題の渦中にある“ひと”が科学的合理性を受け入れるには共感が必要です．また，社会のあり方に対する理念を共有する必要もあります．問題に対峙するためには合理性，共感，理念の共有が必要であり，問題解決に関わる研究者は科学的合理性の際を超える必要があると考えるようになりました．

地域研究の重要性に対する主張も私にとって重要な課題でした．今となっては思い出ですが，千葉大学における最初の外部評価における個人評価では「ローカルに陥る危険性がある」と評されました．当時はグローバル偏重の雰囲気がありましたが，ならばということでローカルな地域こそ環境研究の一丁目一番地という意気込みで研究を続けてきました．環境研究における基本は地域研究にあり，地域研究の成果を集めて比較研究やメタ解析を行うことでより上位の課題へアプローチすることができます．例えば，印旛沼の水環境研究は他の閉鎖性水域における研究と比較し，メタ解析することによって，水質だけでなく都市－農村関係や近代文明のあり方といった上位の課題に接続することができ，福島の問題とも共通性を持つようになります．これがローカルとグローバルをつなぐ道だと考えています．

こんな主張を続けていると科学と社会の関係性について考えるようになります．科学には“基礎科学”と“課題解決型科学”があると思います．科研費は前者，省庁の競争的資金は後者に軸足があるのでしょう．もうひとつ，“問題解決型科学”というものを考えました．それは問題の人間的側面，事象の深層に入り込んで問題を解決しようとするものです．それは因果関係に基づく一本道の科学ではなく，”こころ”の領域にも入り込んで諒解や合意，ときには諦めの形成を支援するところに特徴があります．高度成長期の20世紀型科学と低成長期の21世型科学はめざす方向が異なってもよい．基礎科学，課題解決型科学，問題解決型科学，そして社会あるいは環境を頂点に持つ四面体で科学と社会の関係を捉えることができると考えるようになりました．これについては原稿を纏めているところです．

現役時代はいろいろな分野に入り込み，誠に勝手気ままな学者暮らしを送らせて頂きました．その課程で研究の対象は地下から宇宙，そして“ひと”にまで広がりました．2023年3月に定年を迎えましたが，最終講義のタイトルが「わがまま学者の半生記－隠者への道－」です．私の世代は好奇心駆動型の科学を楽しんだ最後の世代かも知れません．今は課題解決型研究が主流となる中で，研究者の専門性が深まるとともに世界観も狭くなり，その外側の世界から承認が得られにくくなっているように感じます．

最終講義のタイトルの後半は「隠者」とありますが，定年後は隠者になると宣言しました．隠者といえば鴨長明が有名ですが，彼はそこそこの才能はあるのですが，どうも中途半端で，すぐ投げてしまうところがあるようです．それが自分に似ているような気がします．それでも，鴨長明は世の中のありさまに関心を持ち，方丈記に書き残しています．私はステークホルダーのひとりとして地域，私にとっては“下総の国”における問題，課題を総合的な視点，視座から眺めつつ，問題解決を共有するコミュニティーで多少の実践をしていきたい．それが私の隠者暮らしです．

ふり返ると水文・水資源学会にはお世話になりっぱなしでした．今は現役を退いた多くの先達の先生方には本当にお世話になったのですが，私自身はその恩に応えていないし，若手に伝えるということもやっていない．そんな自分勝手な私ですが，隠者として水文・水資源学の深化と，社会との接続の強化を達成する様子を眺めることを楽しみとして生きていこうと思います．

【略歴】

1958年生まれ．1980年千葉大学理学部地学科卒業，1985年筑波大学大学院博士課程地球科学研究科地理学・水文学専攻修了（理学博士），1985年筑波大学水理実験センター文部技官，1987年東京都立大学理学部地理学教室助手，1993年筑波大学地球科学研究科講師，1995年千葉大学環境リモートセンシング研究センター助教授，2004年同教授，2023年千葉大学名誉教授．現在に至る．この間水文・水資源学会で第6期編集出版委員長，第11期総務委員長，第14，15期副会長，第17期会長，などを務めた．